

台湾の高等教育に関する調査報告

Report on Higher Education in Taiwan

宮澤 文玄 (学習院大学)、松尾 隆 (成蹊大学)、根本 和彦 (津田塾大学)、
原 裕美 (神戸大学)、堀 佑二 (獨協大学)、深野 政之 (大阪府立大学)、
吉崎 誠 (関西外国語大学)、黒澤 真爾 (関東国際高等学校)

MIYAZAWA, Bungen (Gakushuin University), MATSUO, Takashi (Seikei University),
NEMOTO, Kazuhiko (Tsuda University), HARA, Hiromi (Kobe University),
HORI, Yuji (Dokkyo University), FUKANO, Masayuki (Osaka Prefecture University),
YOSHIZAKI, Makoto (Kansai Gaidai University),
KUROSAWA, Shinji (Kanto International Senior High School)

抄 録

関東地区研究会では、これまで諸外国の高等教育事情を実地で知るシリーズを開催し、全国各地から参加者を集め好評を博してきた。これらの継続性から、今回は台湾にて日本の大学や高校の教職員とともに大学等の教育機関を訪問し、台湾の高等教育の現況を実地で知り、得られた知見を参加者が今後の施策に役立てることなどを目的とし、2018年8月5日(日)～8月8日(水)に実施した。

本調査は、①マクロ的：台湾の高等教育の特質と課題、少子化の動向など、②メゾ的：訪問各大学の戦略的課題、教育プログラムの特長、国際化の展開など、③ミクロ的：SD、FDなど職員の育成などの視点を踏まえ、各大学における高大接続・学生確保、大学の国際化戦略、職員の人材育成、大学と卒業生との関係の構築などの課題を中心として、淡江大学、国立台湾師範大学、中国文化大学、国立政治大学、実践大学、ならびに台湾教育部において訪問調査を行った。

今回の調査で得られた共通の知見として、少子化が日本以上に深刻化した状況下において、台湾の各大学は学生確保に向けた取組を行っていること、またグローバル化により、台湾の各大学は程度の差こそあれ、大学の国際化に向けて大学の強みを活かしつつ様々な施策を講じていることが挙げられる。

本稿は、大学等の機関での訪問調査から得られた知見および日本の大学への示唆などについて、参加した大学関係者ならびに高校教員の視点から報告を行うものである。

Abstract :

The Kanto Regional Research Group has organized a series of surveys to gain practical knowledge about the situation of higher education in other countries, which has attracted participants from all part of the country and gained popularity. As part of this series, we visited 5 universities and the Ministry of Education, Republic of China (Taiwan), together with Japanese universities and high school faculty and staff, to learn about the current situation of higher education in Taiwan. This took place on August 5 (Sun.) to August 8 (Wed.) in 2018, with the aim of devising future strategies.

This survey was divided into three categories: 1) A macro-perspective: characteristics and issues of higher education in Taiwan, and trends of declining birthrate, 2) A mezzo-perspective: strategic management issues of these universities, features of the educational program, and internationalization, and 3) A microscopic viewpoint: training of staff such as SD, FD, etc. We conducted a survey visit focusing on issues such as the connection between high school and university, securing students, internationalization strategy, developing human resources of staff, and building relationships between universities and graduates at each university.

As a common finding obtained in this survey, with a declining birthrate more severe than that of Japan, each university is making efforts to secure students, and through globalization, each Taiwanese university has adopted various measures taking advantage of its own strengths toward internationalization, although there is a difference

in level.

In this paper, we report on the findings obtained from surveys at the 6 organizations visited, suggestions to Japanese universities based on them, and the viewpoint of high school teachers.

キーワード：台湾 (Taiwan)、スタッフ・ディベロップメント (Staff Development; SD)、
大学の国際化 (Internationalization of Universities)、大学マネジメント (University Management)、
淡江大学 (Tamkang University)、国立台湾師範大学 (National Taiwan Normal University)、
中国文化大学 (Chinese Cultural University)、国立政治大学 (National Chengchi University)、
実践大学 (Shih Chien University)、台湾教育部 (Ministry of Education, Republic of China (Taiwan))

はじめに

大学行政管理学会（以下JUAM）の事業計画の重点課題では「グローバル化への対応」を掲げており、関東地区研究会ではこの方針に基づき、これまで諸外国の高等教育事情を知るシリーズを開催し、全国各地から参加者を集め好評を博してきた。

少子高齢化、グローバル化の進展やAIをはじめとする技術革新などに伴い、社会構造も急速にかつ大きく変化している。日本の教育現場では、高校及び大学教育や入学者選抜の一体的な改革、いわゆる高大接続改革の取組みが推し進められてきている。このような状況は、少子化が進む近隣諸国においても同様であり、なかでも台湾では大学進学率が非常に高く、高校と大学の接続問題が深刻化し、それらに対応した積極的かつ多様な政策が実施されているものの、日本では知られていないのが現状である。

そこで、今回は海外大学スタディツアーを台湾にて行うことを計画した。台湾教育部傘下の日本台湾教育センターとの共催で、JAFSAの後援も得て、日本の大学や高校の教職員とともに大学等の教育機関を訪問し、台湾の高等教育の現況を実地で知り、得られた知見を参加者が今後の施策に役立てることなどを目的とし、2018年8月5日（日）～8月8日（水）に実施することとなった。

本スタディツアーは、本会員はもとより東京・千葉・茨城・神奈川・愛知・大分から大学附属校2校を含む私立・公立高校の校長・教頭も参加する16名から成る視察団となった。

本稿では、実地で得られた知見などをもとに台湾の大学との相対化を行うことにより、日本の大学や高校において実現可能な改革方策を検討する機会とするとともに、事例研究の一環として展開し、個々の教職員

と大学、ひいてはJUAM全体の今後のグローバル化推進にも繋げることを目的とする。

なお、訪問機関は以下のとおりである（表1）。

表1 調査対象機関一覧¹⁾

大学名	設置形態	学生数	設立年	専任教職員数
淡江大学	私立	25,343	1950	1,192
国立台湾師範大学	国立	16,018	1946	1,620
中国文化大学	私立	21,364	1962	1,592
国立政治大学	国立	14,593	1927	1,487
実践大学	私立	14,579	1958	711
台湾教育部				

はじめに、訪問機関において得られた知見・日本の大学への示唆の視点からの報告に加え、高校教員からの報告、最後に本スタディツアー報告の考察をもってまとめとする。

1. 淡江大学（報告者：宮澤）

(1) 同大学から学んだこと

淡江大学は創立以来の教育理念の筆頭に国際化を掲げているだけのことはあり、グローバル化に大変力を入れている大学である。学部により1年間の留学を必須とするシステムを作った台湾初の大学として、英語教育に特化した学部を置くキャンパスも持つ。また、この大学は日本語文学教育も盛んであり、その例として「村上春樹研究所」を設置している。

この研究所の所長である曾秋桂教授は、同時通訳者であると同時に台湾日語教育学会の理事長なども務めている。そのような教授に今回の交流会では通訳をして頂いた。

交流会では入試制度や職員人事制度の概要、教育の質保証、卒業生組織の活用などについて意見交換を

行った。台湾の雑誌による調査「台湾大企業2,000社が選ぶ学生」ランキングにおいて、常に私学でトップにランクされる大学だけあり、いずれも充実した内容となっている。

その中でも印象に残ったことは、偏差値のような序列はあるのかという質問に対して、「存在はするが、それよりも教育内容の充実が受験生からの尺度としてより重要で、そうした意味からも選ばれる大学として努力している」という発言である。また、奨学金政策と絡め、研究型大学か教育型大学かの質問に対して、「教育型大学で、学生や社会のニーズに応じて実学も踏まえた教育体制を整えている」という回答を明確に述べられ、その後のランチミーティングでも発展した話題となった。交流会を通じ、大学の役割と教育の質保証という課題は日本と同様であることを改めて感じた。

(2) 日本の大学への示唆

キャンパス内に3つの学生寮と3つの教職員宿舎があり、フードコートのような食堂の他、24時間開放の自習室など生活に必要な機能が学内に整っているのは、日本の都心部の大学ではなかなか見られない光景であろう。東西文化を融合して造られた「宮灯教室」などの建物とともに、現代建築もありながら自然と調和した環境が作られている。

なお、日本側参加者に、淡江大学の協定校である津田塾と学習院の両大学の管理職がいた関係もあり、協定校からの来訪があることが副学長の耳に入っていた。8月1日に学長と副学長が交代したばかりで着任5日目であるにも関わらず、今後の実務に向けた話や双方の表敬訪問に至るような話題も出た。こうした機会を逃さない行動は、日本では見られない意思決定の早



副学長はじめ多くの教職員が参加した国際会議場での交流会風景（淡江大学）

さを感じた。淡江大学側の国際化への視点やスピード感 は日本の大学も見習うべき点であろう。

2. 国立台湾師範大学（報告者：堀）

(1) 同大学から学んだこと

国立台湾師範大学では、図書館訪問と迎賓館（ゲストハウス）での宿泊、またキャンパス見学をした。図書館は地上8階、地下1階の建物で、中央が8階まで吹き抜けとなっている。図書館入口である1階には「師大校史展示廳」があり、ここでは建学の理念から大学の歴史、キャンパスの写真などをデジタルアーカイブにして展示している。ここで注目したいのが、入口になっている階層のすぐ近くに、大学史に関する展示がなされている点である。

日本においても、建学の理念を示すことができる大学史は近年重要視されてきているが、ここ台湾の大学においても、大学史の展示が知の拠点である図書館に存在するという事は、同じように建学の理念などを重要視していることがわかる。また、入口横には様々な大学ロゴ入りのオリジナルグッズを販売する売店があり、大学史と学生の帰属意識を結び付ける意味も含まれているであろうことは興味深い点である。

なお、国立台湾師範大学は、インターネット上で図書館を現場さながらに体験できるようになっている²⁾。大学史の展示、そして壮大な吹き抜けの図書館をウェブサイトからも体感できる。

(2) 日本の大学への示唆

迎賓館（ゲストハウス）は、国立台湾師範大学に直接関係ない我々でも宿泊することができた。日本においては、その大学の教育・研究のために直接関係し、来学するゲストに利用させるケースはあるが、このような例はあまりない。今後は日本でも、大学間連携が活発化して連日の研修が実施され、また、シンポジウムで海外から講師を招聘することも考えられることから、このようなニーズが増えることもあり得るだろう。さらには、災害などの対応で大学内に留まらなければならない状況でも活用できるであろう。

周囲に宿泊施設が多い場合にはあまり問題にならないだろうが、そうでない場合にはその対応に困難をきたす場合がある。また、ゲストハウスに宿泊してもら

うことで、事前の打ち合わせなどがスムーズになる。また緊急対応が可能になるという利点がある。こうしたことから、日本の大学でもゲストハウスを取り入れる必要があるのではないかと考える。都心型キャンパスでは困難な部分も多いだろうが、台湾師範大学は街の中心地にありながら、学生寮さえも隣接している点は日本の大学も参考にすべきである。

また、朝8時前にキャンパスを見学した際、早朝にもかかわらず、キャンパス内のいたるところで太極拳をしている団体がいくつも見られた。体育館の正門側へ行くと太極拳をしている銅像が見られるが、まさにこの銅像が様相を表しているように思えた。もちろん、学生寮や教職員宿舎がキャンパス内に立地することを含め、日本の大学、特に都心の大学ではあまり見られない光景である。

日本の大学で求められていることの一つとして、地域交流がある。地域交流と考えると、どうしても教育や経営という観点から、公開講座の開講や施設貸出というところに意識が行きがちであるが、この台湾師範大学の光景のように、憩いの場所としての大学、市民生活と一体化している場の提供ということも考えていく必要があろう。



北京大学から贈られた2.5mの太極拳像
(台湾師範大学)

3. 中国文化大学（報告者：松尾）

(1) 同大学から学んだこと

中国文化大学は私立大学でもあることから、自大学の歴史と建学の精神をよく理解し、それを学外者に向けてもきちんと伝えていこうとする姿勢が感じられた。

創立時（1962年）の台湾は蒋介石による国民党の支配下にあったが、中国文化大学の建学の趣旨は、当時の時代背景なども反映されたものであり、「中国文化」「三民主義」が前面に出ている。

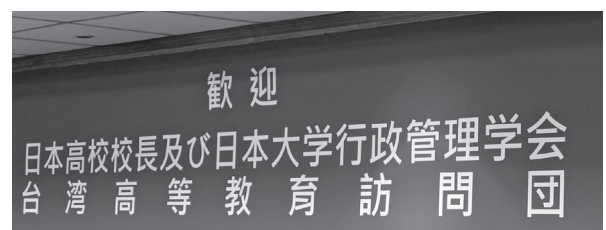
建学から50年以上経つうちに台湾では民主化や台湾独立の潮流など大きな社会変化があり、「自分は台湾人である」と考える市民が大半を占めるようになってきた。今では日本以上に少子化「先進国」となった台湾において、今後どのようにして中国文化大学の特徴を受け入れてもらえる工夫をしていくのかが大きなポイントとなるのではないかと感じた。

(2) 日本の大学への示唆

キャンパス内はすべて無線LAN網が張り巡らされており、どこからでもアクセスが可能である。一方、PCルームも設置されているが、PC本体の数が学生数と比して足りないために、テラスを改装してPCルームにするなど、学生へのサービスを主に考える姿勢が感じられた。また、体育館の最上階に吸音式のミニシアターが付設されており、学生の劇の発表や小さな式典に利用されているなど、施設が充実していることは注目すべき点である。

中国文化大学の周辺には米軍の旧宿舎を再利用したカフェなどがあるほか、天母地区から親山歩道が通っており、山の中を1時間ほど歩いて登るとちょうど中国文化大学に到着する。台北市内にありながら、陽明山という国立公園の傍らに位置し、他大学にはない自然と歴史が感じられる環境にある。一方、市街地に行くには山の中腹にあるため坂道をアップダウンしなくてはならない。

『遠見雑誌』（2015）³⁾ の調査によれば、受験生が大学選びの基準とする指標のランキングでは、家からの距離（8.7%）よりも、寮環境（20.9%）が上位にある。他の大学でも基本的に学内寮が完備している大学が多いことを見れば、多少交通が不便であってもそれを上回る利点を打ち出すことができる。このような発想の転換は日本の大学でも必要な視点であろう。



今回のために作製された大きな横断幕
(中国文化大学)

4. 国立政治大学（報告者：根本）

(1) 同大学から学んだこと

国立政治大学は、台湾教育部よりトップ大学計画の12校に選定されており、国際競争力を有する大学を目指している。海外の協定校は60校ほどあり、日本では東京大学、京都大学、早稲田大学、慶應義塾大学、筑波大学などと協定を締結している。

交流会において、はじめに我々視察団全員に対して大学紹介が行われたが、次の意見交換の時間になると、高校関係者と大学関係者に分けられ、高校関係者には進学担当の教職員が、大学関係者には大学運営担当の教職員が加わって、それぞれでグループ討議を行う形式になった。このような形式は、他大学の訪問時にはなかったことであり、それぞれの関係者にとって実務的な質疑応答を行うことができた。特に高校関係者に対しては、より具体的な進学相談を行うことができることから、この大学の日本の高校生にアピールしたいという熱意が感じられた。

職員研修の面では、国際交流を通して中国本土の大学と協定校職員交流があり、3か月から6か月間派遣及び受け入れがある。また、EUの大学とも職員交換があり、経費をEU持ちで派遣したりもしている（期間：1週間から10日、年間8名枠）。職員の中には博士課程在学中の者もあり、主に夜に大学院で学んでいるが、週1日は仕事を休んで大学院で学べる制度もある。

(2) 日本の大学への示唆

大学説明の際に上映された大学紹介ビデオは、英語版が用意されていた。さらに、日本語の字幕が追加されており、日本向けの紹介の準備が進んでいることが印象的であった。日本の大学でもこのような配慮ができればと感じた。また、国際競争力を高め、海外からの留学生獲得に力を入れている点としては、国際系の新学部設置を計画しており、新学部では全ての授業を英語で行うという。大学にはもともと中国語センターがあり、中国語のできない留学生はここで中国語を学んでから正規授業を受けることができる体制にしており、英語と中国語の両方を学べることをアピールしていた。常にアピールする姿勢は、日本の大学も見習いたい。

その他、施設面ではキャンパスを拡張し、メディア

系学部を新キャンパスに移す計画を実施中であったり、キャンパスの近くにMRT（地下鉄）の駅ができる計画があるため、より交通の便が良くなることをアピールポイントにしていたりと、常に施設面充実にも配慮を欠かさぬ姿勢が参考になった。

なお、意見交換の際には、ドイツ人留学生がこの模様をインターンとして取材していた。そして、即日にこの催しを大学の公式ウェブサイト⁴⁾に英語で掲載したスピード感も学ぶべき点であろう。



成熟したホスピタリティ。参加大学のロゴを
採り入れた歓迎の案内板（国立政治大学）

5. 実践大学（報告者：吉崎）

(1) 同大学から学んだこと

・学長のリーダーシップの下、大学マネジメントを実践していること。

実践大学では、校訓である「力行実践・修斉治平」をミッションとして掲げ、また大学の行動原理としての価値（バリュー）として「創新・実践・至善」を明確に打ち出している。また、内部環境や外部環境の分析・評価（SWOT分析）を行い、自大学のポジショニングを見極めている。そのうえで「選択と集中」を行い、『アジア太平洋地域における優良な実用型の教育重点大学』になることを発展の方向性（ビジョン）として掲げている。その実現のため4つの教育目標（「倫理化」「芸術化」「科学化」「生産化」）、ならびに「実用教育の実践」「手厚い学修支援」「国際交流の更なる推進」「産学連携の推進」「キャンパス整備」「大学マネジメント」の6つの発展戦略（ドメイン）を定め、その実現のためにそれぞれ行動指針を設定したうえで実行に移している。まさに、学長のリーダーシップの下で、「戦略的プランニング（Strategic Planning）」

の手法を用いた大学マネジメントを実践していることがうかがえる。

- ・「大学の国際化」を最重要課題として捉え、その施策を着実に実践していること。

陳振貴学長は就任時（8年前）から「大学の国際化」を重要施策として位置づけ、海外との協定校の拡充、「英語のみの授業」で学位が取得できるプログラム（国際ビジネス学科）、中国語センター（華語中心）、国際学院（International College）の創設など国際学習環境の充実に積極的に取り組んでいる。また、教職員の国際化にも尽力し、各部署への英語のできる職員の配置、TOEFLスコアの人事評価への導入、海外での研修の機会の提供などソフト面でも積極的な取り組みを実践している。これらの取り組みにより、台湾の大学ランキング「大学の国際化」で第9位となり、13大学を抜き一気にトップ10にランクインを果たした。

- ・学生確保に重点を置いていること。

台湾の少子化も深刻化しており、台湾国内の生徒はもとより、海外の生徒も積極的に受け入れる取り組みを行っている。

（2） 日本の大学への示唆

・学長のリーダーシップ

日本の大学マネジメントにおいて、「学長のリーダーシップ」が叫ばれて久しい。ここ実践大学では、現学長がこれまで他大学で学長などを務めた知見・経験を踏まえ、上述したとおり、経営者として戦略的思考により明確な方向性を提示し、大学の資源の集中・選択などを行うとともに、各部署においてはこれらの戦略計画を実行している。大学はこれらにより多大な成果を上げ、知名度も向上している。陳学長のリーダーシップについては、日本の大学マネジメント実践において参考にするべき点多々あろう。

・「大学の国際化」への取り組み実践

実践大学は、「大学の国際化」において、大学の強みを最大限に活かし、新しい施策を実現している。とりわけ上述の国際学院は、大学の教学面での強みである「デザイン」分野、「国際ビジネス」分野に加え、リベラルアーツ教育の3つの教育モジュール、ならびに留学プログラム（交換留学、ダブル・ディグリー）などを組み合わせた国際通用性のあるプログラムを構

築している。当該施策は、日本の大学における「グローバル大学」推進のためのベンチマークになろう。



大学の行動原理を建物の壁にビジュアル化し、周知する特徴的な取組み（実践大学）

6. 台湾教育部（報告者：深野）

（1） 教育部から学んだこと

最終日には、日本の文部科学省にあたる台湾教育部を訪問した。最初に、国際及兩岸教育司の教育副参事と科長より、台湾の高等教育の概要について説明がなされた。大学・短大進学率は、1970年代には10%程度だったのが、1990-2000年代に急増して2010年に70%に達し、現在（2016-17年度）は71.24%である。台湾では、都市部ではほぼ100%の高校卒業者が高等教育機関に進学しており進学率が頭打ちになっていること、また日本以上に少子化が急激に進行し、学生の集まらない大学、経営状態が悪化している大学の統合や廃止が課題となっていることが、数字上の説明からもよく理解することができた。

続いて、競争的プロジェクトによる大学改革、大学の国際化事業、新南向政策、世界大学ランキングなどの説明があり、日本以上にこうした点を意識して政策レベルとして落とし込み、各大学もこのような動きに対応していることが分かった。

（2） 日本の大学への示唆

日本と台湾は深刻な少子化とそれによる大学マーケットの縮小、政府によるトップダウン型の“大学改革”の進行という点で共通しており、それは大学ガバナンスの“改革”を伴い、しかも台湾が先行している。地理的にも社会的・政策的にも近似性を有する台湾の高等教育を比較研究することには重要な意義がある。

今回は、日本の高校生を修学旅行で招いたり、台湾

の大学を留学先として紹介したりするという教育部の意向が強く反映されたヒアリングであったが、台湾が国際社会の中で独立した地位を保って発展していくために、高等教育政策が重要であるという教育部の強い意志を感じることができた。



対応頂いた国際関係部署の副参事、科長との
集合写真（教育部）

7. 日本の高校教員からの報告（報告者：黒澤） ・日本の大学及び高校への示唆

いずれの大学も、視察団一行に対し、丁寧に教育内容や施設環境についてプレゼンテーションをして頂き、台湾の大学教育全般を知る上で非常に参考になった。個人的には高校の管理職という立場上、生徒の進路先としての台湾各大学は魅力的であるかどうかという観点で、各々の大学のプレゼンテーションを聞かせて頂いた。

結果、今回訪問した各大学については、毎年本校の生徒を預けたいという気持ちになった。中国語を本校で一定程度学び、さらに能力を高めたいと思っている生徒には、特に淡江大学と中国文化大学を薦めたい。そして東アジアの歴史文化や国際政治について、様々な国の学生と英語を中心にした授業を通じて学びたいと思っている生徒には、国立政治大学を推薦したいと感じた。その他全般的には、特に実践大学の取組みに魅力を感じた。ここで話をした日本人留学生の姿を見て、有力な進学先として検討に値する大学であると言える。

高校生に台湾留学を薦めるにあたり、実際に台湾の大学に留学している日本人学生から様々な話を聞くことができたのも、大きな収穫であった。入学前の中国語学習や学生生活、さらに将来の就職についてなど、不透明だった台湾での留學生活について理解を深めることができたのは貴重な経験となった。

また、総じて台湾の主要大学が、日本からの留学生

の獲得に熱心であることがよくわかり、これはある意味当然だと感じた次第である。台湾も日本や韓国と同様、少子化の問題を抱えている。大学の将来を考えた場合、ドメスティックな学生のみにも頼るわけにはいかないのは今や自明なことである。今回の台湾訪問を通じ、これからはアジアの大学間で意欲のある学生の争奪戦がより熾烈になることは間違いないであろう。

日本の主要大学も、台湾や韓国の大学に遅れることなく、言語教育の問題（英語・現地語）を含め、独自のカリキュラムの開発をはじめとした大学改革が求められるはずだ。

8. 考察

今回実施した台湾での海外研修の意義は、主に、①台湾の高等教育の実情を現地で知ること、②ここで得た知見を各自の施策に役立てること、③グローバルな職員になること、の3点が挙げられる。

①について、高等教育機関は当然ながら日本のみならず世界各国に存在する。地理的、歴史的、経済的に異なるため一口に大学と言っても世界各国様々である。それでも、日本の大学での研究、教育、社会貢献という大きな柱の部分については、世界各国でも共通する部分があるだろう。また、大学は自国の学生のみならず他国からの学生も受け入れている。海外の大学を知ることが、世界の大学の潮流に付いて行くという点においても重要であると考え。その点では今回の台湾教育部への訪問は、海外の高等教育情勢を知るきっかけになった。

②について、台湾は日本同様少子高齢化社会が進行している。大学の視点から考えるべきことは18歳人口の減少である。18歳を定点としてみると、台湾ではピーク時には40万人いたが、現在は30万人を切ってきている⁵⁾。日本も18歳人口が減少しているが、台湾はより深刻な状況である。そのため、台湾の大学では、国内のみならず海外からの学生（留学生、正規学生）も増やす努力をしている。各大学の取組みからもその努力の結晶を垣間見ることができる。このように台湾と日本の大学は類似性を有することから、日本の大学での様々な局面での施策等において参考となる点が多々あると考える。

③について、日本の大学においても国際化が推進さ

れており、職員に対しても様々な場面においてグローバル化対応が求められている。しかしながら、「職員のグローバル化」にかかる明確な定義はなく、語学が堪能な職員か、諸外国の大学に精通しているかなど、何をもってグローバルな職員であるかということは、今一度各大学でも検討する必要があるだろう。本スタディツアーは、「グローバルな職員」とは何かという問いに対する一つの答えを見出す契機になるのではないかと考える。

おわりに

参考まで、今回の各大学訪問にあたっては、以下の質問票を事前に作成し、交流会時の質疑応答において回答を準備頂くよう予め依頼した。

【台湾の大学訪問における事前質問票】

A.マクロ（台湾全体について）

- (1) 高等教育政策の特質と課題
- (2) 18歳人口の動向と大学入試の概要
- (3) 高大連携事業の状況
- (4) 私立大学助成と補助金政策
- (5) 外国語教育の現状

B.メゾ（貴学の事例として）

- (1) 重点戦略課題
- (2) 学生確保戦略
- (3) 教育プログラムの特長
- (4) 大学評価への対応
- (5) 内部質保証システム
- (6) 学修成果の可視化
- (7) 大学の国際戦略と展開
- (8) 大学と卒業生との関係と構築方法
- (9) 日本の大学と同様な校友課や同窓会の有無と位置付け
- (10) 卒業生や社会全般へ寄付を依頼する文化の有無
- (11) 大学や法人が持つ株式会社の有無、有る場合はその事例

C.ミクロ（職員の事例として）

- (1) FD、SDの取組み
- (2) 人事異動の有無と人材育成の方針や取組み
- (3) 昇格制度の事例
- (4) キャリア開発のための学外専門組織の有無と事例
- (5) 職員に求められる能力と役割

(6) 職員の社会的位置付け（他業種との比較）

(7) 採用時の選考方法、応募形態、倍率

これらの設問については、現地での交流会等の場において、双方の話題提供として密度の濃い情報交換を行うことができた。そこでの詳細は誌面の関係で記すことはできないが、引き続き本研究を深化させるために、本稿ではその一側面からの事例を述べるに留め、回答の結果と分析については今後の課題とする。

また、今回は台北周辺の大学のみでの訪問となったが、地方の大学では既に倒産や統合などの事例も出ている（教育部幹部の談）ため、今後は都心部のみならず地方も含めた台湾全体の状況を調査する必要性も感じた。

以上、台湾の大学での現況を通して、日本の大学の課題が見えてきたため、単に数値的な側面でのベンチマークだけではなく、実際に現地に足を運んで国際比較を行う意義（実地で知る）を今回の研修を通して強く感じた。関東地区研究会は今後もこのような現場に即した内容を展開していく予定である。

こうした研修を繰り返すことで、参加した教職員のグローバル化が進み、ここで得た知見・経験等を各大学等の施策に役立てることができよう。個の力が強まることで、学会全体の組織力にも繋がることを信じて、今後の関東地区研究会の活動を通して、本会のさらなるグローバル化進展に向けて寄与していきたい。

最後に、本スタディツアーの開催にあたり、日本台湾教育センターの徐聖芬事務長、郭艶娜主任には多大なる協力を賜り、また同じ国際交流の発展を目指すJAFSAには後援を頂いた。この場を借りて全ての関係各位に感謝を申し上げる。



学会の発展を祈念して、台湾・十份名物の
“ランタン上げ”を行う。

注

- 1) 各大学の学生数・専任教職員数（2018年11月8日
閲覧）
淡江大学
<http://www.tku.edu.tw/acadvalue.asp>
国立台湾師範大学
<http://yreport.iro.ntnu.edu.tw/>
中国文化大学
<http://omi.accounting.pccu.edu.tw/bin/home.php>
国立政治大学
<http://financial.nccu.edu.tw/index.php/13-2/>
实践大学
<http://info.usc.edu.tw/files/11-1006-120.php>
- 2) 「展上簡介」国立台湾師範大学 数位校史館 展
場與參觀資訊
<http://archives.lib.ntnu.edu.tw/about/map.jsp>
（2018年11月8日閲覧）
- 3) 「企業最愛大学・大学辨学特色」調査『遠見雜誌』
2015年2月16日号、遠見天下文化出版、2015年。
- 4) 国立政治大学ニュース（英語版）
<https://www.nccu.edu.tw/en/news/NCCU-Opens-its-Doors-for-a-massive-Delegation-of-Japanese-University-Representatives-and-High-School-Principals-58059903>（2018年11月8日閲覧）
- 5) 「人口年齢分配」『内政部統計年報』中華民国内政部
https://www.moi.gov.tw/files/site_stuff/321/2/year/year.html（2018年11月8日閲覧）